Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XVII, 2013

国際仏教学大学院大学研究紀要
第17号（平成25年）

新羅玄一撰『無量寿経記』諸本の系譜
――書陵部蔵奈良朝写本を中心として――

南　宏信

新羅玄一撰『無量寿経記』諸本の系譜
――書陵部蔵奈良朝写本を中心として――

南　宏信

はじめに

『無量寿経記』とは康僧鎧訳『無量寿経』を新羅僧玄一が注釈したものである。上巻のみが現存し、その注釈範囲は『無量寿経』上巻に対応する。活字版が『卍続蔵経』（三十二巻）に収録されているので容易に繙くことができる。内容は『大智度論』や『瑜伽師地論』等の経論を多用して注釈しており、特に阿弥陀仏の四十八願の理解では新羅僧法位に依拠している。(1)

恵谷隆戒氏は新羅浄土教の系譜を（一）浄影寺慧遠（地論宗）の浄土教の系譜と（二）玄奘・慈恩等（唯識系）の浄土教（円測・憬興・太賢・遁倫等）の系譜に大別している。浄影寺慧遠の系統の中にはさらに皇竜寺の系統（円光・慈蔵・元暁・義湘・義寂）と、法位・玄一の系統との二つの系譜をあげている。(2)

玄一に限って見ると、恵谷氏は、「玄一の著作は法位の著作によって記したもの」（五九頁）や「玄一の『無量寿経疏』（ママ）に彼の説を引用し、彼が殆ど法位の説に依っている」（六一頁）と言及し、具体的には法位の解説をするのみである。恵谷氏の系譜の分け方を見ても分るように、玄一はあまり注目されていないようである。

一、引用文献に見る玄一の特徴と生没年

その理由として挙げられるのは、玄一の事績を伝える伝記がなく、現存する著作が『無量寿経記』のみということである。よって生没年は未詳であり、他の新羅僧の著作における玄一への言及や、自身の著作の内容から類推するしかない。つまり憬興の『無量寿経連義述文賛』が玄一に言及することや、玄一が基（六三二～六八二）、元暁（六一七～六八六）を引用し、特に法位（唐代、七世紀）の『無量寿経義疏』を多用することから七世紀から八世紀初めの人物であろうとされる。以下、引用文献を整理することで、今一歩生没年に関して検討したい。またこの整理より見える玄一の特徴を概観しておく。恵谷氏の指摘通り法位と全く同一であれば、著述を書き残す必要はないのであるから、ここに法位と玄一の相違を明らかにし、玄一の浄土教思想における特徴の一端を示してみたい。

『無量寿経記』の科段は【図二】の通り。一方、恵谷氏が復元した法位の『無量寿経義疏』は、他の書物に散在している引用を収集して復元したものであるので、この復元本によって科段を作成することはできないが、以下引用文献を比較することで玄一の特徴と生没年を見ていく。

法位が『無量寿経義疏』（恵谷復元本）で引用する経論は管見では、『観無量寿経』（六回）、『法華経』（二回）、『仏説仁王般若波羅蜜経』（一回）、『瓔珞経』（一回）、『弥勒問経』[3]（一回）、『弘誓海慧経』[4]（一回）、『摂大乗論』（二回）、『大論』（一回）、『往生論』（二回）、浄影寺慧遠『無量寿経義疏』（一回）である。

これに対して玄一の引用する経論は、『法華経』（四回）、『観無量寿経』（五回）、『阿弥陀経』（一回）、『無量清浄平等覚経』（六回）、『称讃浄土仏摂受経』（一回）、『悲華経』（一回）、『金光明経』（一回）、『瑜伽師地論』（三八巻二

【図二】

- 第四「叙興分」
  - 歎問合儀
    - 如来反問
    - 阿難奉答
    - 嘆今問
  - 叙興世意
    - 総
    - 別
      - 以法済世
      - □□□逢
      - 嘆問多益
      - 其知難重
      - 身興絶蹤世
        - 標立
        - 嘖所由
        - 示所以
- 第五「正説分」
  - 勅聴
  - 対曰欲聞受旨
  - 広説
    - 古仏興世
      - 有王修行
        - 聞法
        - 発心
        - 出家
        - 嘆徳
        - 讃仏
          - 叙敬相
          - 以頌正嘆
            - 七頌讃仏
              - 両頌半讃仏色相
              - 半頌讃仏名聞
              - 両頌嘆仏福智
              - 半頌讃仏断徳
              - 一頌半讃仏恩徳
              - 一行願作仏
              - 一行願修行
              - 一行願願安衆
              - 四行願行不退
                - 両行対劣而明勝
                - 両行挙事而顕勝
              - 両行願摂妙土
              - 一行願摂衆生
                - 一行請世自在王仏為我証明
                - 一行請世自在王以仏神力
                - 十方諸仏令知我心
              - 両行願仏証明
              - 一行願能忍苦
            - 十三頌自述所願
        - 説法
          - 叙請
          - 反問令思
          - 推深請説
          - 如来正説
            - 知機
            - 授法
              - 観相発願
              - 依願起行
              - 修行時節
              - 明命修短
              - 摂行多少
              - 願必得果
              - 説相授与
            - 摂行
              - 明摂行成
              - 令顕説
              - 広陳願行
                - 長行利願
                - 以偈頌
                - 称願動祥
                - 顕願成就
                - 結前
                - 起行
                - 総明起行
                - 別明起行
                - 明勝願
                - 明勝行
            - 摂果相
- 仏摂果相
  - 成仏時節
    - 明成仏
      - 問
      - 答
    - 明時節
  - 器世荘厳
    - 明無悪相
      - 所無
      - 問答料簡
    - 修有善厳
  - 報相妙
    - 釈迦自嘆
    - 衆聖共嘆
    - 顕説無尽
    - 仏寿
      - 例釈寿命
      - 略歎数及徳
      - 広明数量
      - 徒衆寿
  - 摂（報）命（寿）修短
  - 徒衆多少
    - 総明数多
    - 略明徳大
    - 別願顕社会数多
    - 明諸宝樹
    - 明菩提樹
    - 明校量顕勝
    - 明七宝厳殿
      - 正明池流
      - 明彼声
      - 明池流狭衛
  - 宝樹麗
  - 楼閣槃爵
  - 徒衆摂果相
    - 明生類
      - 総題往生類
      - 別顕生類
        - 明已生者摂果相
          - 内徳
          - 外徳
          - 形徳斉等
          - 校量顕勝
            - 如来問
            - 阿難奉答
            - 如来述成
        - 明欲往生者行相
        - 明衆聖崇歎
        - 明自土聖徳
    - 明教門
    - 勧励
- 明自利行
  - 長時修
  - 無余修
  - 無間修
  - 恭敬修
- 明利他行
- 明兼利行
  - 明行功徳
  - 別明諸行
    - 明三業調柔行
      - 意業調柔
      - 口業調柔
      - 身体調柔
    - 明六度離著行
      - 二行
        - 釈自利行
        - 釈利他行
        - 釈
      - 明神通示現行
    - 総結
- 述成校量
  - 明諸供具
  - 明徳風
  - 明華厳
  - 広明勝相

回、八三巻八回、九六巻一回）、『成実論』（一回）、『大智度論』（一二回）、『十地経論』（一回）、『菩薩地持経』（一回）、『往生論』（一八回）、『法華音義』[5]（一回）、「玄奘云」（一回）、「基法師云」（六回）、浄影寺慧遠（『無量寿経義疏』等四回）、『観経疏』（慧遠カ、一回）、「法位云」（一三回）、「因法師」（五回）、「弁法師」[6]（一回）、「憬法師」[7]（三回）、元暁（一回）である。

この他には「有本云」（三回）や、外典としては始皇帝による文字統一の一環として李斯（？～紀元前二〇八）らによって作成された『蒼頡篇』（一回）や、前漢の始元六年（紀元前八一）に、桓寛が、朝廷で開かれた塩や鉄の専売制を巡る討論会の記録をまとめた『塩鉄論』（一回）も引用する。

玄一が「法位云」として一三回も引用するのは、恵谷氏が指摘しているように、やはり法位を重視し、依拠しているといえる。他方で法位にはない特徴として『称讃浄土仏摂受経』「玄奘云」「基法師云」など、新訳経典、あるいはその新訳の訳者や弟子を引用している点があげられる。玄奘は六四五年に長安に戻り翻訳事業に着手しているので、法位と玄一との生存年代を隔てる一つの基準となり得よう。つまりこれまでは「七世紀頃」とのみされる法位の生存年代は、その没年を七世紀中頃以降に設定できる。

また玄一は、『往生論』を法位よりも多い、一八回も引用するが、これは偈頌のほぼ半数を『無量寿経』に対応させている。憬興も『往生論』を多く引用はするものの玄一ほどではない。これもまた玄一の特徴として挙げられよう。

二、諸目録に見る『無量寿経記』

まずは諸目録に載録される玄一の著作を参看して整理していく。かつて韓普光氏が『正倉院文書』『新編諸宗

教蔵目録総録』『東域伝灯目録』『浄土依憑経論章疏目録』などで整理しているが、[8]今回はそれに加えて、新出の目録も追加し、また修正すべき箇所も見受けられたので再整理していく。高麗の義天（一〇五五？～一一〇一）編纂の『新編諸宗教蔵目録総録』（一〇九〇）に「玄一」名を五箇所確認できる。

大涅槃經料簡　一巻　玄一述[9]
法華經疏　八巻　玄一述[10]
小阿彌陀經疏　一巻　玄一述[11]
瑜伽論疏　十七巻　玄一述[12]
中邊論料簡　玄一述[13]

日本の目録においては、石田茂作氏が『写経より見たる奈良朝仏教の研究』で『正倉院文書』[14]の記録を整理しており、玄一の著作では「法華疏」「随願往生記」の名前を確認できる。その後佐藤哲英氏が新羅浄土教関係の著作を抜粋して整理しており、そこには以下三回の書写があるとする。[15]

兩卷無量壽經記　玄一集　天平二十年（七四八）
兩卷無量壽經疏　玄一　勝寶四年（七五二）
無量壽經述記　玄一　寶字七年（七六三）

しかし宝字七年の「無量寿経述記」の記述については、以下二箇所の通り、玄一の選者名がついていない。何ら

かの誤りで載録したと思われる。

（一）天平寶字七年（七六三）七月一日の「大師惠美押勝家牒正倉院文書／（續々修三帙十裏）／太師家牒　東大寺三綱務所／合應請疏三百八十二卷」に「＊請」無量壽經述記一卷＊「十五」[16]とある。

（二）天平寶字七年（七六三）七月五日の「奉寫經所請疏文案正倉院文書／（續々修三帙十裏）／「＊奈良」合令疏壱佰陸拾卷之中四卷黄紙及表无帶梨軸十卷黄紙及表綺帶梨軸百五十二卷白紙黄表　綺帶梨軸　宮一切經内之」に「無量壽經述記一卷」[17]とある。

承暦元年（一〇七七）の書写奥書を持つ、僧蓮書写『阿弥陀仏経論並章疏目録』[18]には一箇所確認できる。

阿彌陀經疏一卷玄一（三六ウ三）

玄一の名以外に著者名不明で「両巻無量寿経疏二巻（三六ウ二）」なる書名も挙げるが、これが玄一のものであるかどうかかは判断できない。

興福寺の僧、永超（一〇一四～一〇九五）編の『東域伝灯目録』[19]（一〇九四年成立、今は院政期から鎌倉時代初期の写本である高山寺所蔵本を使用。）によると以下の三箇所に名前を確認できる。

同經記三卷玄一（二〇オ八）

「〇」同疏一卷玄一師（二二オ一）

同經疏三卷玄一師（三八ウ六）

「同經」とは順に『無量寿経』『阿弥陀経』『梵網経』を指す。

『高山寺聖教目録』[20]は以下の通り。

同經疏（朱色）「玄一造」一卷[21]　（『無量壽經疏』）

『古聖教目録』[22]（一一七五年～一一八〇年の書写）は以下の通り。

亦无量壽經記　上中下　玄一集　六十三枚

法然（一一三三～一二一二）の門人で、諸行本願義を立てた覚妙房長西（一一八四～一二六六）が編集した『浄土依憑経論章疏目録』[23]（『長西録』）では、玄一の名は以下二箇所に確認できる。

同經記二卷五丁　玄一　（一〇ウ）　（『無量壽經記』）

同經記二卷五十八丁　玄一（一四ウ）　（『阿彌陀經記』）

「同經記二卷」で「五丁」とあるのは少な過ぎる。

醍醐寺所蔵文書である『三宝院経蔵目録』の「三宝院経蔵顕教聖教目録[24]」には、

同經記　在下卷　玄一集

とある。当該目録は座主義演（一五八八～一六二六）が慶長九年（一六〇四）に書写したとある。その奥書には永仁六年（一二九八）とあり、その時点における蔵書の概要を知ることが可能である。記録の通り下巻が現存しているのであれば、玄一の思想を探る上で非常に有益である。

以上、まとめると合計八本が確認できる。

○大涅槃經料簡　一巻
○法華經疏　八巻
○小阿彌陀經疏（阿彌陀經疏）　一巻
○瑜伽論疏　十七巻
○中邊論料簡
○兩巻無量壽經記（兩巻無量壽經疏、無量壽經疏）二巻、或は三巻
○梵網經疏　三巻
○隨願往生經記一巻

今話題としている『無量寿経記』は「疏」「記」の呼称を見るが、次項でみるかぎり、現存諸本は「記」のみが伝わっている。巻数に関しては「二巻五丁」「三巻」「上中下」とあり、また巻数を記さないものもあり表記は区々である。但し現存本を見る限り、『無量寿経』の注釈範囲が上巻の最後までであることから三巻本であった

とは考え難く、二巻本であったとする方が妥当であろう。また著者名は「玄一集」「玄一師」「玄一述」「玄一」の表記がある。

最後に、時代は下がるが玄智（一七三四―一七九四）編『浄土真宗教典志』附録第三「無量寿経」の段に「記二巻玄一撰。出二東域長西二録一」とあるのを確認できる。ところが「観無量寿経」の段に「記□巻　玄一作」[25]とあげる。同じく文雄（一七〇〇―一七六三）輯録、養鸕徹定（一八一四―一八九一）増補『蓮門類聚経籍録』巻上では、「大経疏釈類」で「記二巻○東域伝灯目録作三巻」とあげ、また「観経疏釈類」にも「記　一巻　唐　玄一」[26]とあげる。観経の注釈書は、先行する諸目録には確認できず、『無量寿経記』を誤って伝えたのかも知れないが、ここにあげておく。

三、『無量寿経記』の伝本

伝本を整理した結果、現存する諸本は全て、現在宮内庁書陵部が所蔵する奈良朝写本から派生したと予想されるので以下に俯瞰していく。その作業の中で宮内庁書陵部蔵本が伝本中で最も依拠すべき善本であることを提示したい。

（一）書陵部蔵本

本書は『図書寮漢籍善本目録』（一九三〇）中に

雙巻經疏零本三軸

奈良朝寫經題釋玄一集書法亦佳

とあり、「奈良朝写経」とされている。上巻が三軸に分かれており、本文が一部欠落している。[27] 書誌情報は以下の通り。

請求記号「七五五四」。箱号「五一二一―六一」。第一軸は外題に「双巻経疏」とあり、これは書陵部に所蔵された際の修復時に付されたものである。首尾・中間欠。料紙は黄楮打紙を使用。一紙縦二九・三糎、横五五・〇糎、界高二三・五糎、天界二・六糎、地界三・二糎、界幅一・八糎、二十九行二十四字（第二紙）。全八紙。淡墨界。棒軸（新補）。虫損があり、状態は不良。全てに裏打ちが施してある。巻首に朱の蔵書印の一部が残存している。ここには他の諸本には見られない冒頭箇所が七行分確認できる。

第二軸は外題に「吉備公」とある。全六紙。これは書陵部が所蔵した時にすでに付されていたものである。三軸に別れた時に付された表紙と同じ時期の書であろうか。遣唐使の吉備真備（六九五～七七五）と共に渡唐した玄昉（?～七四六）は、多くの仏典を将来している。[28] いかなる由来があって「吉備公」と書かれたのかは知る由もないが、『正倉院文書』の書写記録には天平二十年（七四八）とあって、その時真備は五十四歳である。しかも該本は奈良朝書写であることを鑑みれば、「吉備公」の筆も何か確かな由来があってのことかもしれない。但し次項で見る様に、江戸後期の僧侶順芸が模写した時点では一巻本の形を留めていることは確かであるので、三軸に分かれた後に表装されて外題に「吉備公」と書かれたのは、現在よりそう遠くない時期である。

第三軸は「双観経疏　阿」とあり、その下に「巻末ニハ両巻経記トアリ又釈玄一一巻ト記セリ」と書い

外題箇所
（右）第１軸（中）第２軸（左）第３軸

た付箋がある。全九紙。尾題に「両巻経記」、次いで「釈玄一集」とある。「阿」が何を指すかは不明である。現存部分の巻首に単廓四角朱印で「帝室図書止幸」とある。全体を通しては「書法亦佳」とある通り、首欠・中欠ながらも三軸とも丁寧な楷書で書写されている。

この欠損を補うのが後述する順芸（一七八五―一八四七）書写本である。字体・字詰め、更には破損箇所の型取りや行間の空き具合までが全く同一である。倶にマイクロフィルムの紙焼きからの比較なので推測の域を超えるものではないが、これは隣に置いて書写したというよりも、雁皮等の薄い和紙を直接重ねて書写した可能性が高い。

（二）大谷大学蔵丹山順芸模写本

請求記号「宗丁2」。巻子一巻。浄土真宗大谷派の丹山順芸（一七八五―一八四七）の書写である。[29] 書写時期は不明。書陵部蔵本（奈良朝写経）のものと全く同一の字体・字詰めの巻子である。破損箇所を筆で模っていて、それが書陵部本と全く一致する。文字が欠けていて、何の文字が書かれていたのか判断できない箇所も忠実にその形を書写している。このことから順芸書写本は書陵部蔵本を書写したものであろう。書陵部本は途中、本文が欠落しているので、この部分は順芸が書写した後に欠落したということになる。

順芸は黄檗版蔵経と高麗版蔵経とを校訂しているが、その作業は三回行って校了とした。書陵部蔵本を直接披閲し、字体、字詰め、破損の状態もその通りに書写しているところに、慎重かつ几帳面な彼の性格を伺い知ることが出来る。

ただし書写箇所の冒頭は、順芸書写本の方が書陵部蔵本より七行程度少ない。書陵部蔵本の冒頭は蝕損が酷いが、現在は裏打ちの補修がされているので、冒頭部の判読が可能である。順芸書写本と改めて比較してみると、

冒頭七行部分は他の料紙と剝がれていることがわかる。よって順芸は書写時に判読が困難であったので省略したのではないだろうか。

いずれにせよ順芸書写本が忠実に書陵部蔵本を書写していながらも、その後この七行は活字にされることなく現在に至っている。

（三）大谷大学蔵嘉永七年書写本

請求記号「宗大２４７７」。外題「両巻経玄一記　全」、界線無し（上部四糎、下一糎の空き）、毎半葉二〇字一〇行、全四三丁、和綴じ一冊、縦二三・七糎、横一六・四糎。

順芸滅後七年の嘉永七年（一八五四）に書写された和綴じ本である。奥書に「嘉永七年甲寅首夏中旬第一日謄写竟　右原本在濃州興雲寺」とある。またその後には別筆で「大学寮蔵本」とある。

内容は濃州興雲寺[30]蔵本を「謄写」したものである。蝕損等で欠けている箇所を筆で模り、可能な限りその中を朱筆で補填しているが何を参照して補填したのかは不明ある。次項（四）の原本である。（二）（三）とは字詰めが違うが、開始の冒頭箇所は順芸書写本と同一である。また書写の誤りで脱字があるがその箇所は書陵部蔵本・順芸書写本の丁度一行分に相当する箇所である。この一行分の脱字から、濃州興雲寺蔵本とは書陵部蔵本あるいは順芸書写本そのもの、又はその系統に属する伝本の「謄写」を指すことになろうか。しかしながら乱丁や脱字があり、『卍続蔵経』も修正してはいるが、完全ではない。

（四）京都大學藏卍續藏本

請求記号「蔵／一一／ム／一」。（四）は表紙の左上に「無量壽經記」、その下には「上（残冊）下（佚失）」とある。表紙と裏

表紙以外は袋綴じで、二箇所でとめている。二丁裏には大正三年二月五日の登録印と「京都帝国大学之印」の印がある。該本は青写真による複写であり、画像に写る大谷大学の蔵書印とその位置からみて（三）の複写であることはまず間違いない。

本書には空格（□）や註記が朱筆で施してある。この書き込みは、『卍続蔵経』所収の『無量寿経記』と一致することから、これが活字版の原版になったと思われる。また末尾には墨書で

傳云原本藏洛西栂尾寺、眞宗東派美濃興雲寺
本依存本寫、帝京大學寮本依興雲寺本轉寫
此磨光■大谷大學寮本

とあるが、その上には朱筆で×と書かれており、『卍続蔵経』にも反映されていない。

所蔵元の京都大学附属図書館データベースの書誌事項では「景照本　栂尾本ニヨル転写」とあるがその根拠は分からない。（三）を景照（影照）したものが（四）であるので、（三）のことを「栂尾本ニヨル転写」と判断していることになる。そして（三）の奥書には「原本在濃州興雲寺」とあることを勘案すると、「栂尾本」とは興雲寺所蔵本のことを指すことになる。さらに加えるならば、（三）は、前述の通り、書陵部本系統の伝本であるので、「栂尾本」とは書陵部本そのもの、あるいはその系統の伝本ということになる。今想像を逞しくすれば、高山寺から興雲寺、そして書陵部という伝播を想定できようが、いずれにせよ現段階では、興雲寺本と栂尾本との関係は推測の域を出るものではない。

（五）京都大学蔵写本

請求記号「蔵／11／リ／1」。大学ホームページの蔵経書院本目録には「鈔本」とある。表紙左上には

兩　卷　經　記　　上下殘冊佚失

（　無量壽經　）

とある。表紙、字体共に（四）と同一である。袋とじの一五丁、二箇所で綴じている。本文は、半葉八行二十四字の合計二四〇行で、字詰めは書陵部本の第三軸と同一である。料紙は半紙のようであり、登録印も（四）と同日であるので、大正三年二月五日をさほど離れるものではないようである

奥書等も無いので、なぜ第三軸に相当する箇所だけを書写できたのかは不明である。前半部分には朱筆での修正が加えられているが、途中で終わっている。

四、順芸写『安楽集』について

ところで、『丹山　幕末を生きた学僧』（越前町織田文化歴史館編、二〇〇八年）には、大谷大学蔵の道綽（五六二～六四五）『安楽集』写本の末尾を掲載し、以下のように紹介している。

当資料は、京都高山寺に所蔵される『安楽集』下巻の写本である。筆致からみて、丹山が書写したものと考

えられる。驚くべきことに、経典の字句だけでなく原点の虫喰いまで精緻に臨写されている。「経典の字句だけでなく原点の虫喰いまで精緻に」写していることは、順芸書写の『無量寿経記』と同じ特徴である。両書の字体も似ている。前述の通り、この『無量寿経記』が奈良朝写本の透き写しである可能性が高いことを考え合わせると、『安楽集』写本も同じく奈良朝写本の透き写しである可能性がでてくる。

『安楽集』は『正倉院文書』に十六回も書名を確認することができる。[31] この図録は「筆致」から順芸のものと判断しているが、『無量寿経記』（書陵部蔵本）と酷似することから、奈良朝写本の字体ではないだろうか。

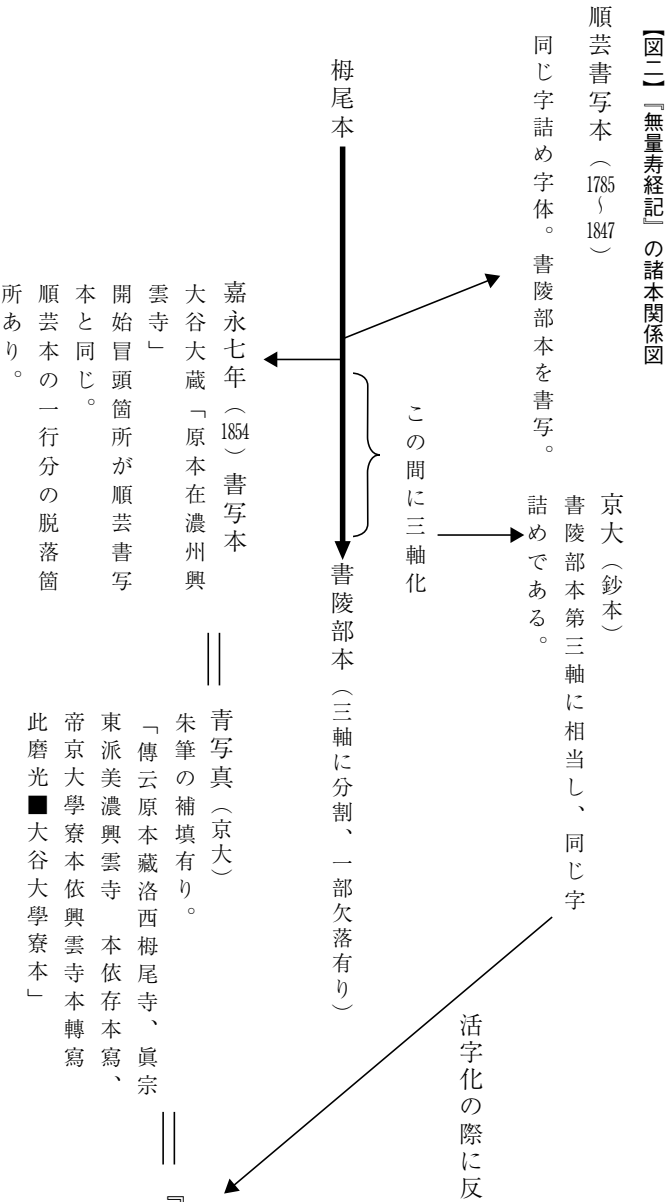
この丹山書写『安楽集』の原本と思われるものが現在、野村美術館に蔵されている。[32] 高山寺の印が押されており、また『高山寺聖教目録』にも「安楽集二部」とあることから、かつて高山寺所蔵であったことが分かる。諸本校訂の上での貴重な資料となる。[33] このことを踏まえると、『無量寿経記』が高山寺に蔵されていたことを間接的に示す資料といえる。

おわりに

諸本の関係を図示すると【図二】の通り。書陵部本を中心に据え、順芸書写本をその欠損を補うものとして位置づけて、谷大本と比較してみると、先に触れたように、谷大本（京大本）には、書陵部蔵本の一行分に相当する箇所の脱落がある。加えて、文章の一部に数行単位で文章が前後に逆転している箇所が確認できる。そしてそれは『卍続蔵経』がそのまま踏襲しているので、このままでは文章が混乱しており意味が通じない。

ここに改めて書陵部蔵本の重要性を確認し、定本を作成する必要性が出てくる。

【図二】『無量寿経記』の諸本関係図



附記
閲覧に際し、宮内庁書陵部・大谷大学図書館・京都大学図書館の御当局に御高配賜りました。ここに記して衷心より甚深の謝意を申し上げます。

注

（1）佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』（二〇一一年）二三六頁。

（2）恵谷隆戒著『浄土教の新研究』（山喜房佛書林、一九七六年）。

（3）『弥勒問経』の引文は、阿弥陀佛の第十八願の「十念」を注釈する中で引用される。この引文は恵谷氏がいうように、智儼（六〇二～六六八）の『華厳経内章門等雑孔目章』巻四が「六念章」の箇所で「復有十念」とし、典拠を示さずに同内容を述べるほか、元暁の『両巻無量寿経宗要』が「弥勒発問経」、龍興（七世紀頃）の『観無量寿経記』が「弥勒問経」、懐感の『釈浄土群疑論』巻五が「弥勒所問経」として引用する。他には、道世（～六八三）の『法苑珠林』が「弥勒発問経」、『毘尼討要』が「弥勒菩薩発問経」、新羅法位が『無量寿経義疏』で「弥勒問経」、『遊心安楽道』が「弥勒発問経」として同文を引用する。

（4）本経は「弘猛海慧経」「海慧経」の名で、隋唐代に僅な引用を確認できる。法位の引用箇所（前掲『浄土教の新研究』三九六頁）は、吉蔵『法華義疏』と慧沼（六四八―七一四）『十一面呪心経義疏』に見ることができる。また『開元釈教録』では「別録中僞妄亂眞録第七」に「観世音十大願経仁寿録云一名大悲観世音経具題云大悲観世音弘猛慧海十大願品大七百」（『大正蔵』五五巻六七五頁中段一二行）とある。このことから本経は隋代から唐代にかけて流布した疑経であることが分かる。

（5）七寺蔵『古聖教目録』（平安時代後期写）には「法花音義二巻　順憬　五十八」とある。（牧田諦亮監・落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書　中国・日本経典章疏目録』六巻一四八頁）

（6）浄影寺慧遠に依止し、浄影寺に住んだ僧に浄弁（?～六一八）が確認できる（『中国佛教人名大辞典』）も、「弁法師」は未詳である。
（7）順憬か。（注5）参照。
（8）韓普光著『新羅浄土思想の研究』六七頁（東方出版、一九九一年）。
（9）『大正蔵』五五巻一一六八頁中段。
（10）『大正蔵』五五巻一一六八頁下段。
（11）『大正蔵』五五巻一一七二頁上段。
（12）『大正蔵』五五巻一一七六頁中段。
（13）『大正蔵』五五巻一一七六頁下段。
（14）木本好信編『奈良朝典籍所載佛書解説索引』（国書刊行会、一九八九年）参照。
（15）佐藤哲英著『叡山浄土教の研究　研究編』（百華苑、一九七九年）。
（16）『大日本古文書』一六巻四〇二頁。
（17）『大日本古文書』一六巻四一六頁。
（18）『真福寺古目録集』（『真福寺善本叢刊』第一巻、第二期、臨川書店、二〇〇五年）。僧蓮は伝歴未詳。落合俊典氏は「取り上げられた書目を概観してみると源信の著述が年代的に最後尾にくると思われる。そうすると弟子であった寛印が『阿弥陀経論并章疏目録』も撰述したと考えることが可能となる。もとより成立年代不明の書が若干あるため断定的には言えないが、十一世紀初頭以降の浄土教の主要な著述が採録されていないことから十一世紀前半までに成立した天台浄土教の経論章疏目録であると言えるであろう。」（同本解題）との見解を示している。
（19）高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺本東域伝灯目録』（高山寺資料叢書第十九冊、東京大学出版会、一九九九年）。

『高山寺本東域伝灯目録』は諸本の中で唯一室町以前に遡れる写本である。また、本書の月本雅幸氏の解題や末木文美士氏が当該書で指摘しているように、『東域伝灯目録』諸本は必ずしも一致しない。しかし『大正蔵』『日仏全』のみの参看だが、今回の箇所に限り異同はみられない。

(20) 「鎌倉中期における華厳教学を中心とした高山寺典籍の概況を知る上で貴重な存在」ながらも尾欠で直接的な成立を示す文言はないが、「成立を示す添書を持つ包紙（江戸時代写本、慧友畢か）が残されていることは珍重すべきことである」。（奥田勲『明恵　遍歴と夢』二二九頁、東京大学出版会、一九七八年）

(21) 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵古目録（高山寺資料叢書第十四冊）』（東京大学出版会、一九八五年）。

(22) 牧田諦亮監・落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書　中国・日本経典章疏目録』六巻二〇八頁（大東出版社、一九九八年）。

(23) 小山正文稿「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」（『同朋大学論叢』六二、一九九〇年）。

(24) 小原仁稿「『三宝院経蔵目録』（一）」（『醍醐寺文化財研究所紀要』第二〇号、二〇〇五年）。

(25) 『大日本佛教全書』九六巻（目録部二）二一〇頁下段。

(26) 『大日本佛教全書』九六巻（目録部二）一五八頁中段。

(27) 書陵部の中村一紀氏のご教授に依ると、明治期に書陵部が所蔵したらしく、最初は三軸が別々に登録されていた。その後同一書であることが判明し、三軸をまとめて「雙巻經疏零本三軸」として登録したそうである。

(28) 落合俊典稿「「東アジア仏教写本研究拠点の形成」の概要」（『いとくら』七、二〇一〇年）。

(29) 丹山順芸は江戸後期の真宗大谷派の学僧である。越前浄勝寺の順慧が父。『金剛経』『金剛般若論』を研究する際に、黄檗版蔵経より高麗版蔵経の方が優良であることを知る。そこで辛苦を重ね、浄勝寺蔵の黄檗版蔵経と建仁寺蔵の高麗版蔵経の校訂を九年の歳月をかけて完成させる。

(30) 興雲寺は浄土真宗大谷派に属し、岐阜県羽島市下中町市之枝二番地にある。この地域は昔から水害が多く、本堂は築百五十年程度。今回、突然の訪問にもかかわらず、羽島市役所の職員の方に連絡を取っていただき、区長の鈴木正美氏と興雲寺責任役員の渡辺嘉彦氏に本堂を案内していただいた。この場をもってお礼を申し上げます。

(31) 木本好信編『奈良朝典籍所載佛書解説索引』(国書刊行会、一九八九年)。

(32) 野村美術館所蔵本に関しては、京都大学人文科学研究所の梶浦晋氏にご教示いただき、平成二十一年八月に京都国立博物館の赤尾栄慶氏と本プロジェクト代表の落合俊典氏の調査・撮影に随伴する機会を得た。野村美術館蔵本の詳細については近々両氏が発表する予定である。

(33) 内藤知康著『安楽集講読』(永田文昌堂、一九九九年)は、以下に伝本を整理している。写本では、高野山宝寿院蔵の天永三年(一一一二)書写本があり、刊本では寛元三年(一二四五)開版、高野山宝寿院蔵(上巻のみ)・寛元三年(一二四五)開版、龍谷大学蔵(下巻のみ)・弘安三年(一二八〇)の刊本を書写した正平二年(一三四七)書写本、(龍谷大学蔵)・元禄十一年(一六九八)義山刻本・宝永元年(一七〇四)などを紹介している。

was been placed on it as a commentary in its own right. In this paper, however, I challenge that view and reassess the scholarly value of *Wuliangshou jing ji*.

Research Fellow,
Strategic Research Project for Private Universities
Granted by the Ministry of Education of Japan
'Establishment of the Research Centre
for East Asian Buddhist Manuscripts'
International College
for Postgraduate Buddhist Studies

Summary

The Relationships among the Different Versions of *the Record of the Sūtra of Immeasurable Life* by Hyon-il of Silla: With a Focus on the Nara-Era Manuscript in the Archives and Mausolea Department of the Imperial Household Agency

Hironobu Minami

According to catalogues, Hyon-il of Silla (c. 7th century) penned several commentaries, though only the first scroll of his *Wuliangshou jing ji* 無量寿経記 (**Record of the Sūtra of Immeasurable Life*) survives. A printed version is contained in the *Zokuzōkyō* 続蔵経. It is based on a manuscript from Year 7 of the Kaei Era. A much older version can be found in the form of a Nara-era manuscript in the Archives and Mausolea Department of the Imperial Household Agency. There is also an extant scroll copied from this Imperial Archives manuscript by Tanzan Jungei (c. 1785—c. 1847). Upon comparing these different versions, I discovered several noteworthy features.

To begin with, the Kaei-era manuscript suffers from lacunae and sheets that are out of order. Next, all versions of the first scroll of *Wuliangshou jing ji* are missing the first section. This suggests that they all belong to the same line of transmission, but the Imperial Archives manuscript has six lines of text in its opening section not seen in the other versions.

In *Wuliangshou jing ji*, Hyon-il liberally quotes *Wuliangshou jing yishu* 無量寿経義疏, which was authored by his senior Pop-wi 法位 (fl. 7th century). For this reason, in the past, *Wuliangshou jing ji* has been thought to rely exclusively on the work of Pop-wi, and as a consequence little value